



婦女鑑

五

9
3924
5



門 9
號 3924
卷 5

婦女鑑卷五



目錄 西島休大關

德川秀忠乳母西

德川賴宣母蔭山氏

木阿彌光悦母

德川吉宗母巨勢氏

齊桓衛姬

晉文齊姜

曹僖氏妻

晉羊叔姬

婦
不
登
卷之五
目錄
宮内省藏

早稻田大學圖書館
29.4.23
藏書

婦女鑑卷五 魯漆室女 衛姑定姜 趙將趙括母 樂羊子妻 紫式部 曹世齊妻 羅拉 加羅林路古勒西 路古勒西馬利大關 孫

魯漆室女

衛姑定姜

趙將趙括母

樂羊子妻

紫式部

曹世齊妻

羅拉

加羅林路古勒西

路古勒西馬利大關 孫

婦女鑑卷五

德川秀忠乳母

德川二代將軍秀忠乳母。大婆とのと稱せら

る。もと岡部某の女。初め今川義元の家

人河村善右衛門に嫁して一子を産めし。寡

居して後召されて秀忠の乳母となれり。天性聰

明にしてよく儉を法とめて吝みならず。これ德行

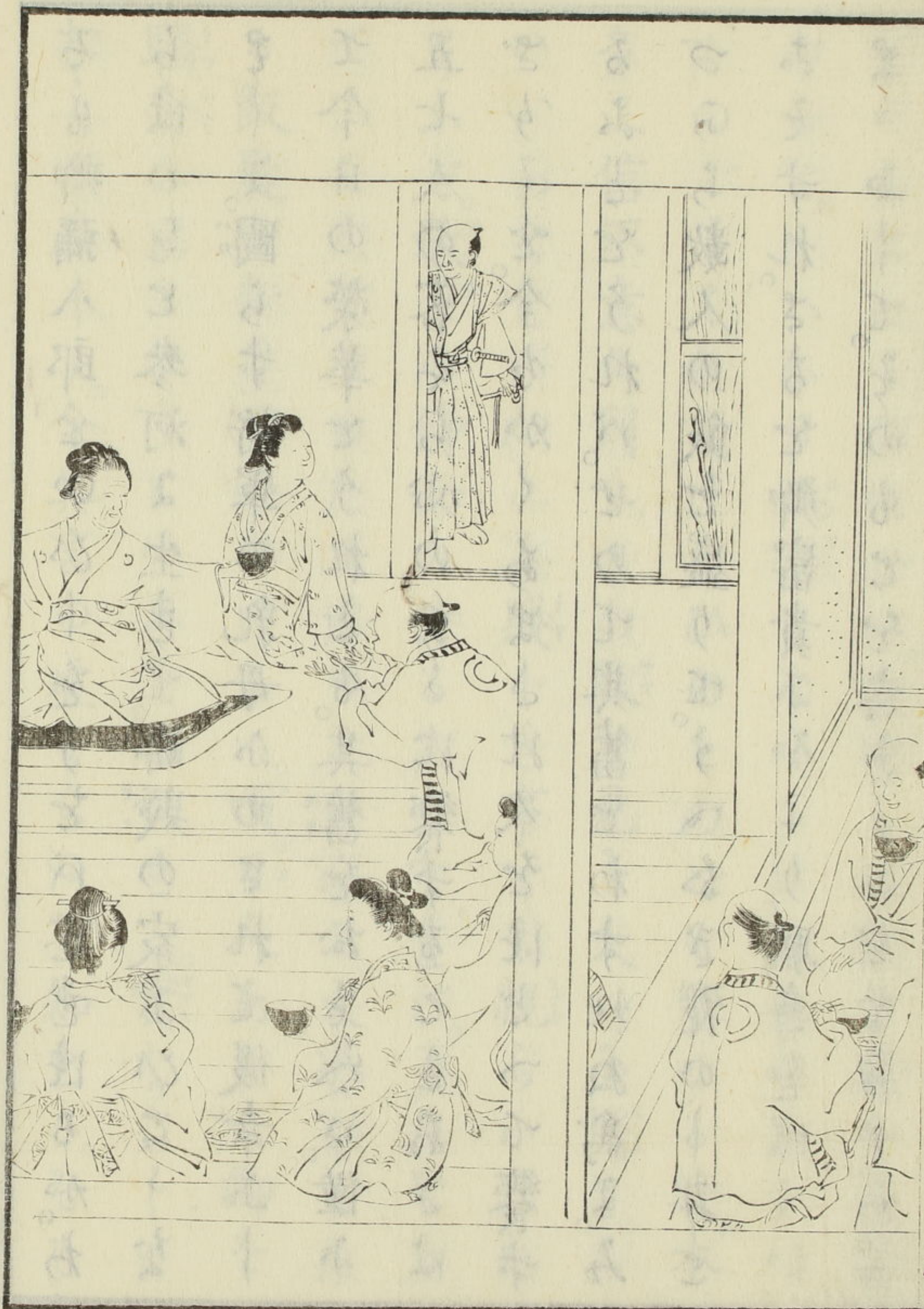
の世に傳ふる。その勤ならず。これ大婆。月おと

ふ一二回め。はかひの奴婢より輿下ふいたる

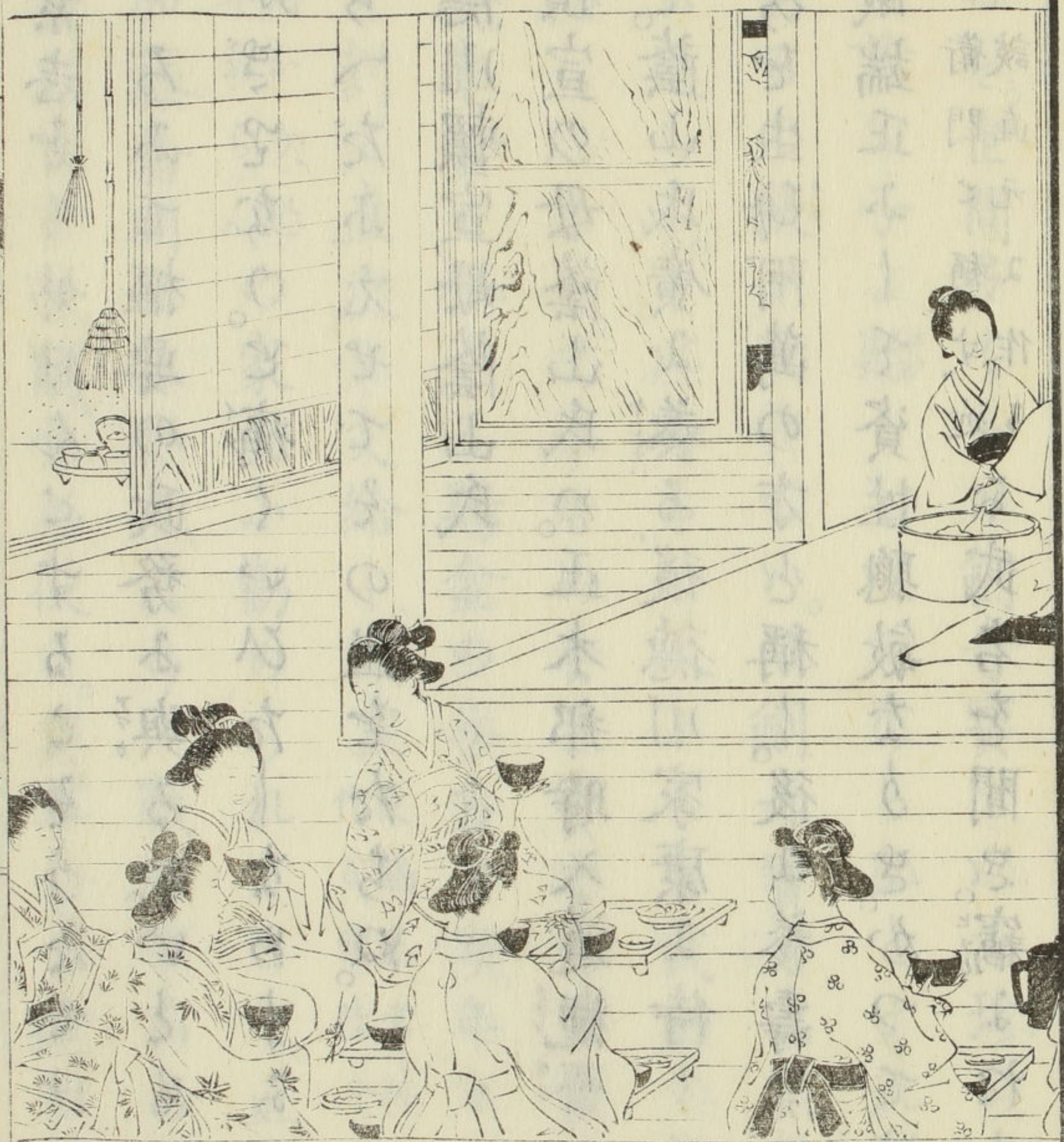
婦女鑑卷五 〇一 宮内省

まで。あまたよびはどへ。手ばら飯を盛りて饗
 ぎると。うへふき娛樂となんけける。ある日いつ
 ものごとく。免しはあひのども饗する時。本
 多正信不意に到り。この状を見く大いお愕き。お
 しいのなきばかり。賤しき事とも親らひ志た
 まふぞ。數多の侍女も侍るおとなきバ。それをし
 ておとなさしめたまはめといふお。大婆をちた
 る飯匙をおきていひける。頃日人ありて卿を
 驕奢おほこれりといふその何きと。實ならトと
 ねとへわし。今其言の虚ならぬを知きり。そも

そも卿彌八郎といひしをりをバ忘きはるか。あ
 らはいとと參河に生きて。鄙賤の家おひとくな
 るし。圖らず將軍の乳母おめされて後幸おし
 て今日の榮華とうれども。其舊をおもへば。僅お
 五七人の客をら心のまゝに饗することあさは
 ざりしと。今をかくあまよ此人をはどへて饗す
 るおととうれバ。せめて其舊をわすれぬ為。み
 づゝら數人の飯を盛りて。うへふきたのしみと
 おすすれ。さると卿富貴おふこり。驕奢をほし
 ましおして。そのもとを忘きしとならず。わら



大婆
飯を
奴婢
小饗
す



櫻湖

はら素志をも妨げんとするこそうたてけれ。さ
るころふて樞要の政務も與るい。いともあや
ふさかぎとなり。と痛くいひたしなめしあべ。正
信いらへだふえせでその坐をたちぬ。

徳川頼宣母蔭山氏

徳川頼宣の母蔭山氏は。正木邦時入道觀齋の女
ふして。蔭山氏廣く養る。後徳川家康も侍して。頼
宣頼房を生む。阿萬の方と稱し。後養壽院とい
ふ。容儀端正ふして資性聰敏なりき。かつて塙直
次團右衛門と稱す。近
古史談直元も作る。武名を聞き。竊もねもは

れけるを。世間多くを刀劍奇寶を以て珍らしと
し。之を諸公子も貽るを以てならひとすれど。萬
一事あるの秋ふおいてい。刀劍奇寶も以て敵を
禦ぐも足らず。そ此時を一人ふても武功の勇士
をなたらんことを。ますものなき寶ならめとて。や
がて鏡臺金と稱する賜金のうちより。年々も貳
百兩を割て直次も支給し。頼宣夜鶴集常陸介の光
貞の稱ふら恐
く非ふらんの家士も勧められしとぞ。直次の
もと加藤嘉明も仕へく。志むく戦功をあらはし。
銃隊長たりしを。關原の役も。其軍令も違ひて斥

けられ。流浪せしむ。それなどの事あるべし。婦女
おして心もちゐの深きおと。これ一事よて餘を
類推すべし。

本阿彌光悦母。その名を妙秀と稱び。次郎左
衛門光二の妻よて。光心が女あり。初め光心小男
子なりしあり。光二を養ひて子となり。長女よ
めあはせしあり。妙秀いとかしおき性よて。人小
絶きたる事ども語りはしへたるも少くらず。中
小もいみじき。ひと年住居のちかきあたりよ

り火にありて。ねやく延焼しけり。その時妙秀は
孫婚の家よも火移りてやけたる。それ土藏へ
も火のいりたる由を告ぐる者ありけき。あふ
うれしや何あうきしや。とぞいひたる。光悦傍小
何しけき。こは何事と。のたまふ。人の家藏を
やき失むるを嬉しといふ事や。侍ると聞と
おめけき。まあと小さる事なり。されどねはこ
たの人の家屋なら。こをあらめ。彼の者れ先祖
某の貧乏おして。饜くおとを志らむ。他人の財寶
を貸金の抵當よとりて。ねのまは有となり。財を

積とて散ずることを志らす。悉くこれを貯へ置
けり。此物なや此土藏ふあまは。此財寶のあ
らむかざりい。必ひとたびの大いなる災ふ遭ふ
べし。と法ねお心おかゝりしを。今こ此土藏ふ火
いりたりと聞て。そせのこりおく焼き盡す。即
災の種を法くすあり。とねをへい。おやえお嬉し
さ此言ふいでたるなり。汝あやしむおとなられ
とぞさとしなる。又常よいひけるい。親子兄弟い
あまりにちかたまは。そ此恩愛も法ねよなれ
て善からぬものなり。遠くてこそ花の香。といふ

如く。何まりに近くて親と過ぐれば。婢僕メシの往來ユキキ
も互に近くなりて。善事ヨキコトのこをいそぬものなり。
又萬一火災おどふあふ事あらんよ。かゝこあ
よわらむすめい。一時災ワザを避るサグふも便タビよし。など
かたりまらせしとぞ。

徳川吉宗母巨勢氏

徳川將軍吉宗の母巨勢氏也。父を利清といふ。世
紀伊國巨勢に住し。農をもて家業ナリガヒと爲す。巨勢氏
徳川光貞お仕へく。吉宗を和歌山城よりむ。正徳
六年四月。吉宗將軍家繼の後を承くるお及び。稱

して浄圓院といふ。品行端正よくて賢明の聞え
あり。吉宗將軍職を襲ぐの後も。常小浄圓院の起
居をどはまけるが。いつも辭し去る此時小のを
きて。三萬石をおわされたまひと。といひけり。こ
ろ吉宗を止め越前丹生三萬石に封せられし時
のふとみて。その本をわすれおきて。驕奢の念を
未萌よいましめしなり。まゝ浄圓院の弟由利。及
び至信と。各抽で。食邑五千石に封せしとき。浄
圓院いひゆるを。從來當家勤仕のその。まゝ紀州
よりこともふつらへてまねきるそのい。いあや

うおもごりたてらるべきなれども。彼等兩人を
元來卑賤の者なるを。いま將軍の外戚たる小よ
りて。かく大祿を與へたまふおと。おそらくを國
家のまつりおととごりたまふの道理よそむき
侍らむら。さりながらすでふその事行それしう
へち。いまさら諫むるもかひなき事なきが。そを
さてねきたまふも。何あち害ある小も何らざ
めれど。此上を兄弟のそのども小。あからず職務
とな命トたまひそ。かくて彼等が子孫よいをり
て器量のそのもいで侍らば。其時をいあやう小

召仕はるとも子細あるまどくこそ。などいさめ
しかぢ。彼の兄弟終身非職よて過しとぞ。古よ
り外戚の權を恃みて。大祿を食し重職を贖して。
汚名を後葉ふのこそもの。その例少あらぬを。
こは賢婦人の一言ふよりて。かゝる弊害のあら
りし實よめでたき例なり。

齊桓衛姫

衛姫を衛侯の女よて。齊の桓公の夫人なり。桓公
つね小淫樂をこのめるを。衛姫あるまどき事よ
おもひをりにふれていさめんとおをへりし

ぢ。鄭衛の音樂をい斥けてきくおとせす。かく
て桓公。管仲、甯戚ネイキおといふものを用ゐて。霸業を
なまふいたり。諸侯を朝せりし。ひとり衛侯
の至らぬを懟ウラて。管仲とはありて衛を伐んとせ
り。偶あさはやう閨よいさまば。衛姫、桓公の氣色
をみて。おとぐく身の飾をきて。堂よりくだりて
いさくはしりみ。衛の罪をゆるされむおととこ
へり。桓公色よもあらはさすとふあはくはしりみか
くせる事おまば。陽りあやしとて。わを衛よおい
て異心なし。何事うおらとつるといふよ。衛姫こ

たへていふやう。妾これを聞く。人君小三色あり。顯然として喜樂し。容貌淫樂なるも鐘鼓酒食の色あり。寂然として清静小。意氣沉抑なるも喪禍の色なり。怒氣充滿し。手足矜動するも攻伐の色あり。今妾君を見る小趾をあぐる小と高く。色厲しく音揚まり。こゝを以て衛をうつものこゝろあるをしれり。さておそその罪をば宥めらまんこととこひ侍まといふに。桓公そのみる小と此所きらかふるにめで。おゝる和とて攻伐の事ををおとひとまり。何くる日。朝よ臨とて政をさ

く小何さり。管仲そ此こゝろの和めを察して。安全と祝しけまば。桓公ますく喜びて衛姫を夫人となし。管仲を仲父と號けて曰く。夫人内をどさめ。管仲外を治めむ。寡人愚かりといふとも。以て世よ立つ小足まりとぞいもまける。

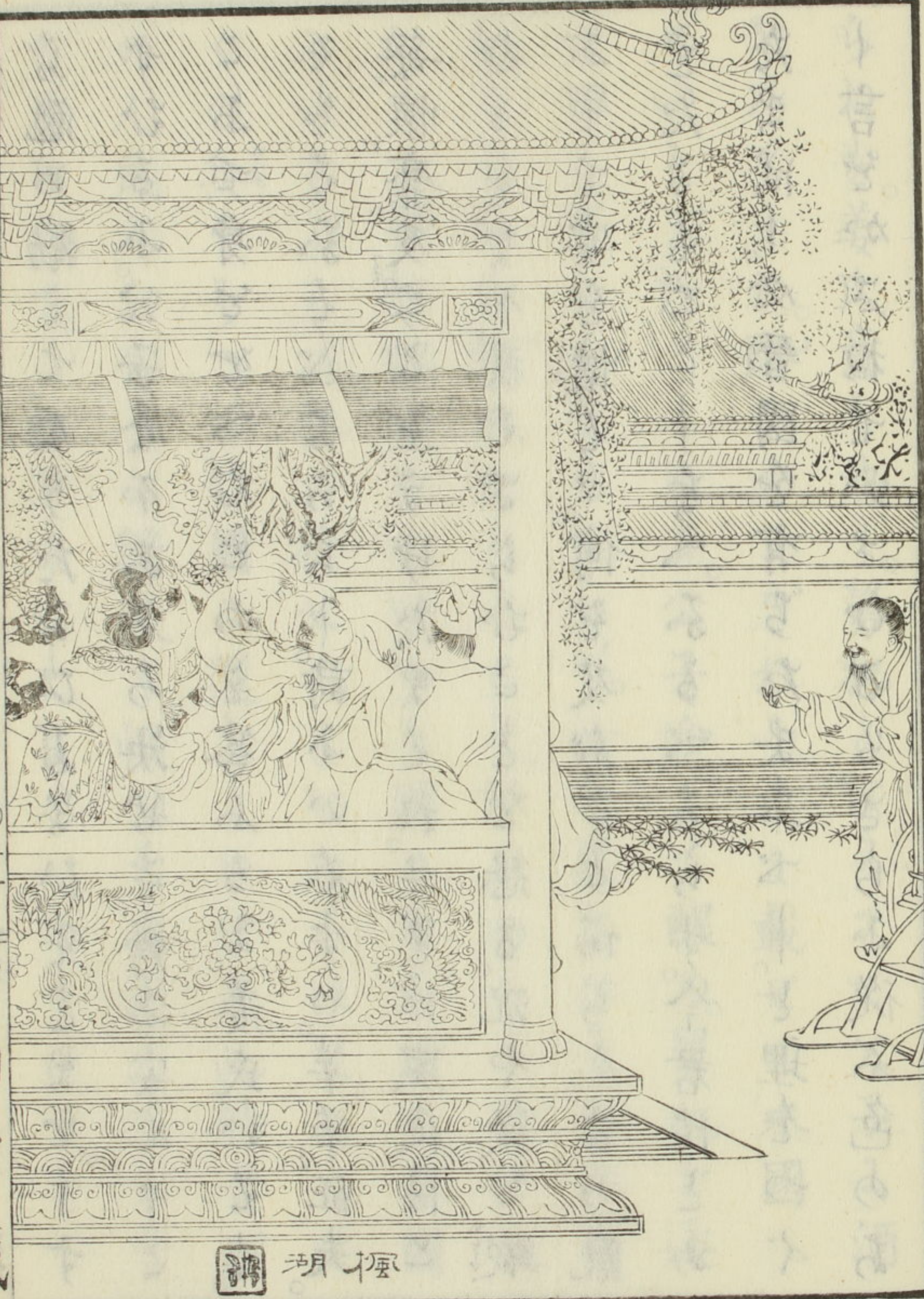
晉文齊姜

齊姜を。齊の桓公の宗女よて。晉の文公の夫人なり。初め文公の父獻公。驪姫といへる勝妾の譖言を納めて。太子の申生をころせり。此時文公を公子重耳といへり。その毒此わが身よ及むん

ことをおそれて。舅犯ともふ乃のきて齊國に
ゆきぬ。齊の桓公その女を公子に妻あてせしむ
の心を安め。いとねんじ落ふきてなけき。何
ひとつ不足なくてと一月を送り。いまを本國に
還らむのあゝるもなかりふなり。かくていふ
やう人の世に處するに安樂にすぐるものあり。
其他の事をこれを志らばといへり。と。公子に
從へる舅犯。公子が齊國に安んずるの心あるを
うかぶひりて。慨ウレシき事におもひ。いかもして
いま一たび本國に還らせむやとのあゝるより。

おのが同志のものと桑樹クサノキの陰カゲにてかこらひあ
はせけるを。それあゝりに養蠶ヤウサンしてありける女。
この事と洩れき。て姜氏小告げしを。姜氏こ
ころの中竊カサふおおきと喜び。やがて公子よかこ
りけるに。君の本國より從へたまへるものども。
君をして本國に還らしめんことを謀り。必彼
ら此す。め小從ひて蹶踏ケツタひたまふべからば。君
晋とさりたまひ。後をむとせむやすらこと
なし。晋國の運命いまど盡き侍らば。晋國の中興
を成すとのを君にあらわして誰ぞや。君みづら

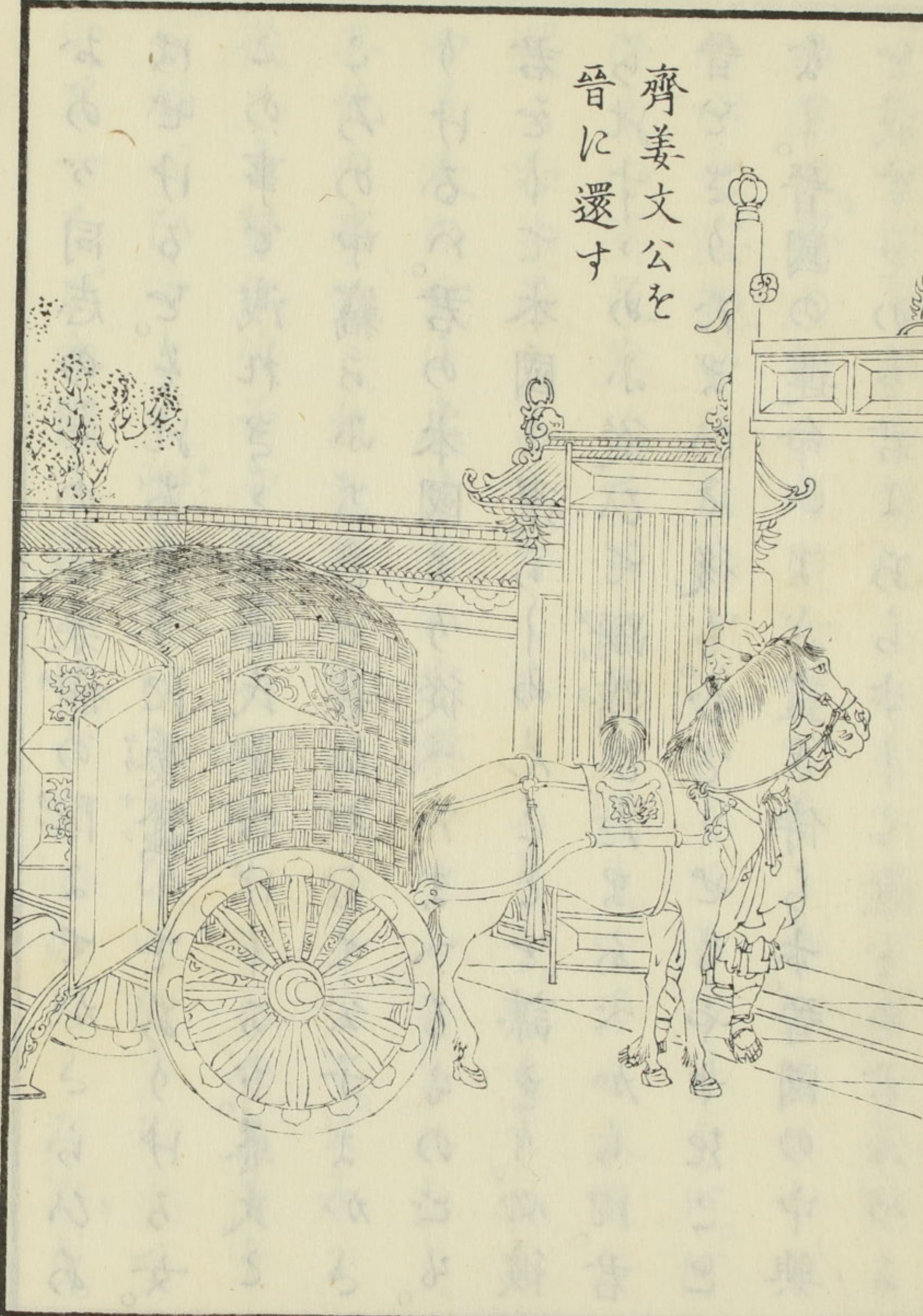
婦
女
鑑
卷之五
○十
宮内省
藏



湖 榎

婦
女
鑑
卷之五
宮内省
藏

齊姜文公を
晉に還す



ら勉め勵みて。なうたおひあまひそとまどす
 すむる小公子なやあゝろ決せむ。齊小安んトこ
 ろふて身とどへんとのと答ふるよ。姜氏いそく。
 そむまおもぶよあらト。詩ふいとすや。莘莘征夫。
 毎懷靡及^レ。どこそうけたまそれ。さむバ夙夜法と
 むるも。なや及むざらむことを恐る。況や欲と縦^{ホレ}
 おして安を懷^{オモ}も。何ぞ及ぶこと何らん。晋の亂
 きたるも。どこ一なへふるべあらず。今君法とめ
 たまは。必晋國を有らたまふべし。と理をつく
 一言をかさねていさむるも。さら小従ふ色のあ

らねむ。姜氏意を決し。舅犯とはる。至て公子は酒
 を乃ましめ。酔ひのまざれ小車に載せて本國へ
 といそぎたしめき。公子途よて醒め。舅犯を逐
 て曰く。事^ト一ならざらば。汝を罪なひくその肉
 とくらふも饜^ウきたらトとぞ。怒里のくしける。
 かくて曹邾鄭楚などいへる國々をそぎて。秦國
 小いし一あバ。秦の穆公おきとたをけて。そこは
 くの兵^{ツギ}をそへて晋國に還らしめけり。此時晋國
 の人民みふ公子に歸服し。懷公をころして公子
 重耳をたて。これを文公となんいへりける。さて

のちふ齊姜を迎へて夫人となり。覇と天下を稱して諸侯の盟主となせり。これより齊姜のいさをふよせりとぞ。

曹僖氏妻

晋の公子重耳。難を避けて齊へ走りたるが。曹を過ぎける時。恭公これをあなどりて。いとなめくぞ。何しらひける。又公子の駢脅なるとき。其旅舎へ近づき。ひそかよそのさまを覗ひみたり。かくて僖負羈が妻。其夫ふかとりけるを。妾ひそかよ晋の公子をうかどひみるふ。その志とあら

るところの三人のものを。皆なとくのものをならす。必國の卿相たるべき人あるべし。たゞふ此三人のもの。善く心を何せ力と一ふして公子を輔けんよ。公子あらず晋國を復し。諸侯を覇とふ里。いま乃禮なかりしものを討つべし。さらばわが曹國をさだちてわろがさるべし。もしあらば。わが夫ひとりこの難を免るべき。何らず。いまよりこれを慮りて。そ此計をなしたまへ。妾聞けるおとあり。其子を志らざるそのを其父を視。其君を志らざるその。其使ふところ

をみる。こふんいへる。まあとふあり。わら夫よ
くおのおろを察し。禮を厚くしてを此こころ
をこりなむ。後必よくおれ小報施あらん。いまこ
れを圖らずを悔とも及むト。といさめけまば。負
羈これ小從ひて。よた食物かどを壺と盛り。その
うへは壁をおきて公子は餽り。そ此心を慰めし
あば。公子食物をばうけて壁をばあへし。そのこ
ころざしを謝しけり。さて後公子果して晋よか
へり。覇と天下を稱する小至り。曹國の罪を問ふ
の秋よおよびて。負羈が功をばそ此郷閭小表し。

兵士をしてみどり小いることならしめけり。
あゝにおいてそのあたり此老幼。よか負羈がす
むところの里よにげ河川まりて。時の難を免あ
せしとぞ。これ全くそ此妻の深謀遠慮よよるも
の小して。その行を君よ貳あるおとくなれど
も。當時戦國のありさまを以てこれを見まば。や
むを得ざるの勢ひよて。智あるとめを久しきを
保ち。智なきとめを保ちあたし。されば機よ臨こ
ての謀も。なくともえあらぬならひぞあり。

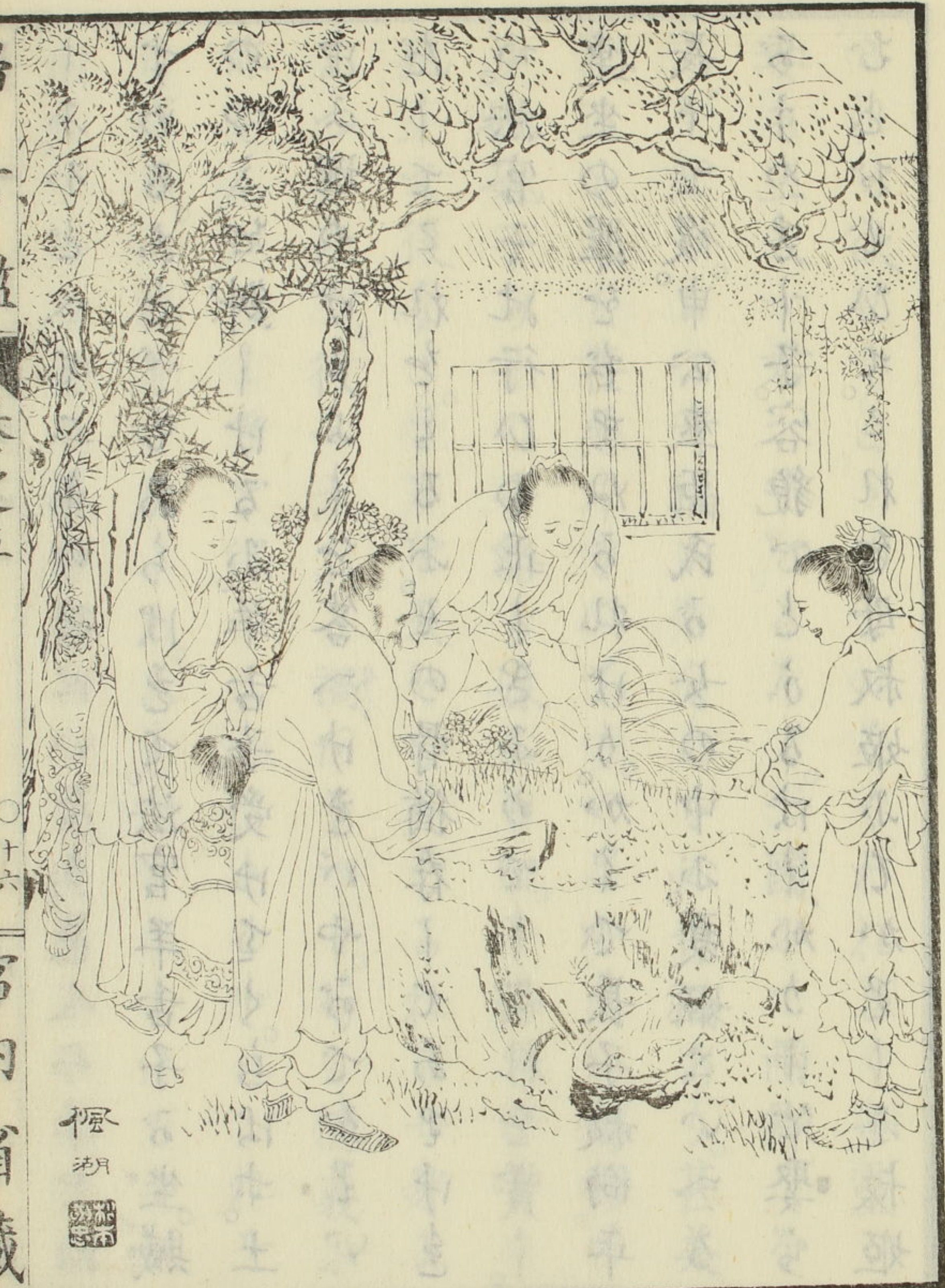
晋羊叔姬

叔姫を羊舌子が妻よて。叔向叔魚が母なり。羊舌子生來方正を志のみて。却て晉よいせられず。三室の邑といふところよゆきて志とける小。邑人これをいたむるとて。官の羊をぬすきて志と餽せり。あむ。羊舌子そ此贓物あるおとせし。斥けて受けぎ。時よ叔姫いさめけるやう。吾夫晉よおて容せられず。さりて三室の邑に來り。此さとふしもいせられざらば。これ身といる。の地なきあり。姑くこれをうけて邑人のころをえんむ。身をいり。此地なきらんよをまさりぬ

べいといふよ。羊舌子やむこととせえず。これと受けて。ふたりの子の為小烹てくはしめむとせし。小。叔姫復しいさめて曰く。南方小乾吉といへる鳥あり。その子を食ふに。その肉をえらむぬおむ。小。そ此子遂に全きおとさし。今二子とも小幼けふし。父母の行ひよあらひく。よくもなりあしくもなるべけむ。不義の肉と以て彼らよはましむべからず。宜くこれを土中よ埋めて。不義よ與とせざる此理をあきらかふし。たまへとて。やぶてその肉を甕よいきて。ものかげよ埋め置き



羊舌子の家小
羊を發掘と



楓
湖

し小。不どへて二年の後にいたり。邑人の羊をぬすめるおとゞもあらはきて。法官羊舌子の坐^ガ賊^ガのつゝを糾^クしける小。羊舌子受けてくらはず。土中よ埋めけるよしを答へけきばやめておしいだしてこれをさる小。その骨猶存してあまけきバ。法官を此行ひの正しきおめで、これを賞し。連坐の罪をまぬられけり。かくて長子叔向。年長トて後。申公巫臣氏の女の中。夏姫といへるおうめし。子容貌いとうるはしかりしと娶らむとおもひて。これを母叔姫ふまかりし小。叔姫

これと欲せずとゞめていむく。われきく子靈が妻を三夫一君一子とくろし。一國おて兩卿をなろがせり。あつ奇福あるをの必奇禍あり。甚美なるをの甚悪しき心あり。いまかきハ鄭穆の少妣姚子の子貉が妹あるを。子貉を名やく死して後なく。さるを天その美をられし一身よあつめたり。後必大なる禍^ガあるべし。苟も徳義小非ぞんば久しきを保つこと何とむト。ごこれをとゞめ。これをいましめ。おまをさとしける小。叔向とつめを母の教を守りしも。法ひ小平公のま

その小従ひ。これを娶りて揚食我を生じ。揚食我
 はひよそ此家をはるばると。祀をたつと至きり
 となん。叔姫お智まおと小朋なりといふべし。
 魯漆室女
 漆室女を魯の漆室邑といへる所よそのめる女お
 り。時をぐるまで嫁せざして家にあり。此時魯の
 穆公いたく老て。太子な幼けおし。漆室女時々
 柱に倚てうちなぶめ嘯ぶさなる小。そのこゑい
 とおふしおとしかば。こゑを聞くその何となく
 あそれおとけし。そのちかどおりの家の婦。つね

おともなひあそびけるが。女お何とさまをきて。
 何故よかくをうちおぶめおとをらん。を一時す
 ぐるまでひとり身おるとなげきたまふならん。
 みづらら媒してよおはあらふべしおといへ
 ば。漆室女おとちを正して。わらわ嫁せざるを為
 おいよでかくおねしむこととせせん。今魯の君、年
 老いたまひ。太子猶幼けなきを憂ふるなりとい
 へど。鄰家の婦笑て。そを魯の大夫の憂ふる所よ
 て。女の與るおとあらと。無用の事よおとるを
 痛めたまひそといふ。女おたへて。いなさおあら

ぞ。されば晋國の客人タビト吾家ミカふやどりて。そが馬を
 園の中ツチ小繫ツナぎたけり。馬ウマもふきてあきまを
 り。園中の葵アオイをふこいだき。その年をつひ
 小葵アオイをくらふおとをえざりき。又鄰家の女メ人ヒトよ
 誘ササもきてはしりしを。わら兄ケイやとはきてこれを
 追オヒ申マウきしふ。とりしも霖ナガ雨アメのころおこ。みりさま
 される川水カハよ溺ノボきて死シし侍サマりしを。わらをつ
 ひよ兄ケイかきの身ミとなりぬ。元世ゲンの中ナカのおと。かく
 おとひもよらぬおとふも禍ワガを被カむることあり。
 況シや今魯イマの君ミコおいくづをれ給たまひ。太子タシを幼コなく

してたろなり。この時よあたりて一たび患ウヅの
 おあるおと何ナニらば。君臣キミ父子コノおとづくを此禍コノを
 被カりて。おやく此人コノよ及およぶむとた。いので婦女メノか
 まばとてこの禍ワガを避サくもの道ミチあるべき。故ゆよこ
 れをおもへどかおとふ堪堪へず。うちおがめて
 なげに侍サマるを。婦人メノの與ヨある事コトならどとをそも
 何事ナニぞ。といひ弟ケイへされて。鄰家トナリの婦メこたふる辭コト
 もおあしけり。その後三年ミチノを出デすして魯國ロク果ミし
 て亂ミを齊楚サイの爲ためよ攻ウツめうたきて。兵革ヘイやむとた
 なく。男子オトコを戦ウツよいで。女子メノを運ウツ輸シユし役ヤクせらるる

など。一日も安きことなかりける。

衛姑定姜

衛姑定姜を。衛の定公の夫人よて公子の母なり。公子既よ婦をむあへてなどなく身まらぬ。その婦に子なかりあるを。三年の喪ををへてのち。故郷よかへすこと。定姜親あらざるをたぐりて國境よ至り。とらざる恩愛の情やとがとく。遙よ見送りて志むく涙よらるるが。やめて詩を賦して曰く。燕々于飛。差池其羽。之子于歸。遠送于野。瞻望不及。泣涕如雨。まことわられてあへる道す

あらも。いとくあそれおねえけまバ。遙あふことかへりて。先君之思。以勗寡人。とふんおとひはげける。いと何それありや。されバ時の人定姜を稱して慈姑とぞいへり。何る時定公。孫林父を憎て黙けられしを。走りて晉國よゆきなるを。晉公これを憫。卻驪といふとのと衛よ法かはして。こまを本國よ還らしめむことと請ひし。定公否びてうけがされバ。定姜諫めていはく。孫林父罪ありといへども。是先君宗卿の嗣あり。大國又これを宥さまんことをこへり。今これ

をいなびたまふを。國家爲に危ふかるべし。固より彼を罪にくむべしといつども。國の何やふさふの易へたかるべし。そとやらにこれをゆるして宗卿の靈を慰め。國家を泰山の安き小おくのまかりおところを何らまほしけき。と理を法くして諫めしあぢ。定公これ小志とびひて孫林父をかへそこととゆるせり。ねやよと定姜の行ひあるのごとく。温恭慈愛よして大智をさへ備へられけき。よく定公を佐けて君徳を失はしめず。詩小いはゆる。其儀不忒。正是四國とあるも。か

ある事とこそいふべけれ。

趙將趙括母

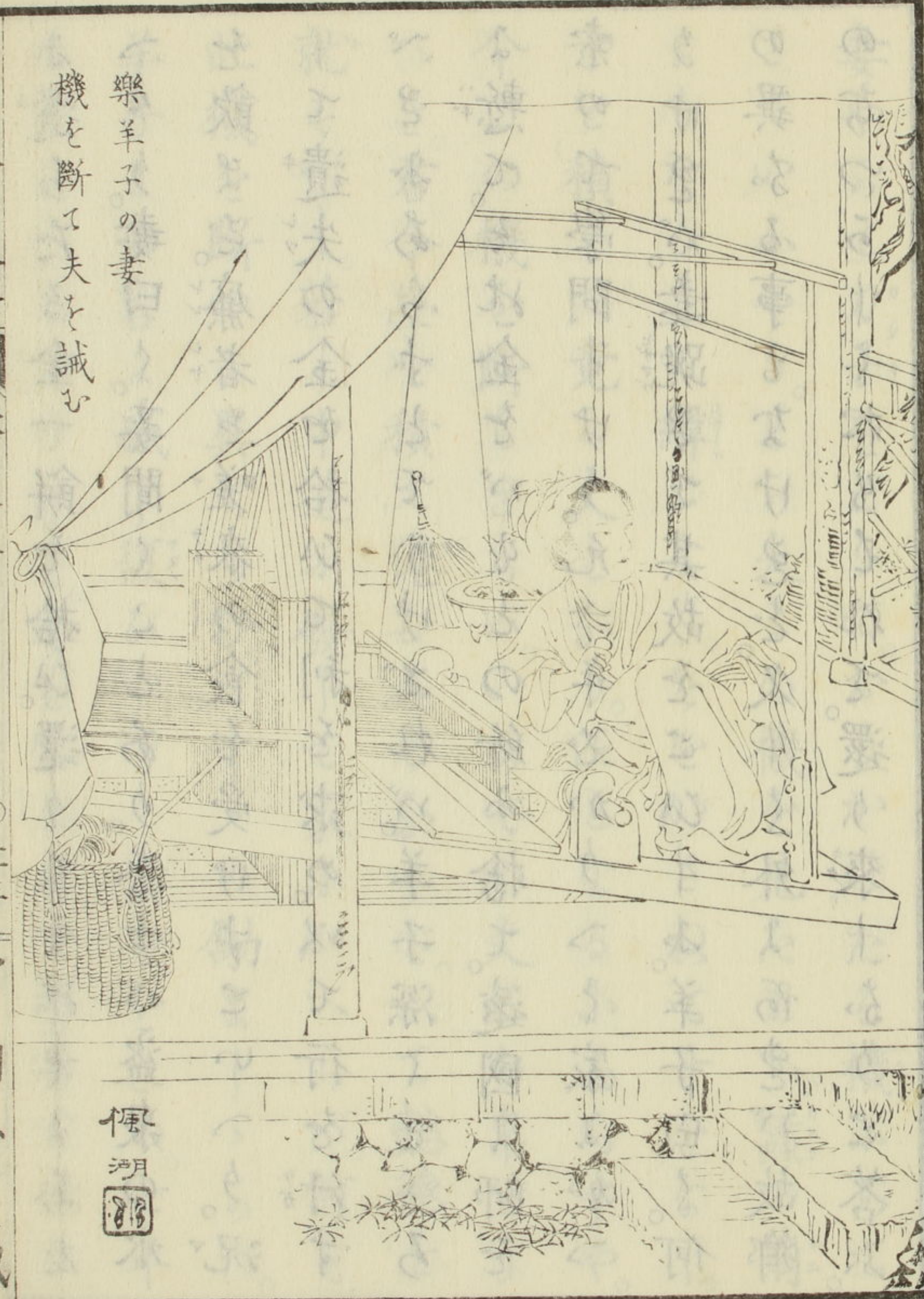
趙の將馬服君趙奢の妻を。趙括の母なり。偶秦國兵を起して趙を攻むるに。孝成王趙括を將となし。廉頗よかたりて征てこれを禦ふ。趙括命を奉けてまさいでた。むとするに。その母上書して。趙括を將としてあかしむるを不可なるよしとせき。こえあげられ。王これをあやし。その故を問とる。小答ふるやう。妾とトめ趙奢は仕へし。小當時奢が爲に甘んとして服事

あるもの數十人。まゝつねに友とする所のを此
數百人あり。さて公のたまものどバ悉くこれを
士卒に頒ち。何さへも。をいふことなく。それ命を
受くるの日。小あたりても。たえに家事とかつり
みるおとあし。今趙括將乃命を拜して軍士とあ
つむる小軍士等の何ふぎみるものすら何らで
いと疎しく。まゝ公より賜ふところの金帛をバ
ことごとく家よをさめて無用の田宅よかふるお
ご。彼お父とをうらうへよて似るべくも何らず。
さるを父とひとしきものおもねがしたまは

バ。かおらず後のくいあらまゝ。孫おまゝいかを
をなゆあしめたまひをとといへど。王その諫を用
お祓バ。さらバ軍よしたごひておれが不足を補
はんといへど。こも聽ユレされで。法い小趙括兵よ將
とし。行て廉頗よ代りけり。後三十日をいでず
て秦の兵よ破られ。趙括を戦死しけり。こゝよね
いて王始めて趙括が母の仁智あるとさとりて
賞嘆せしとぞ。

樂羊子妻

漢の樂羊子が妻を。その氏をいらす。羊子嘗て路



樂羊子の妻
機を断て夫を誡む

俚
月
88

小遺ちたる金一餅を拾ひ。還りてとれ妻よあた
 へり。妻曰く。妾聞くことあり。志士の盗泉の水
 を飲まざ。廉者を嗟來の食を受けずといへり。況
 して遺失の金を拾ひて利を求め。以て行を汗す
 べき小あらずとてうけざれば。羊子深くこゝろ
 又慙て。それ金をばもとの所ふ捨て。遠國よ師を
 索めて學問しけり。凡一年むかりへる家よかへ
 りければ。妻跪きて其故をこひし。羊子曰く。何
 の異なる事もなけれど。久しく外よ向まば故郷
 のなつるしくたもされて。還り來しふりと答ふ。

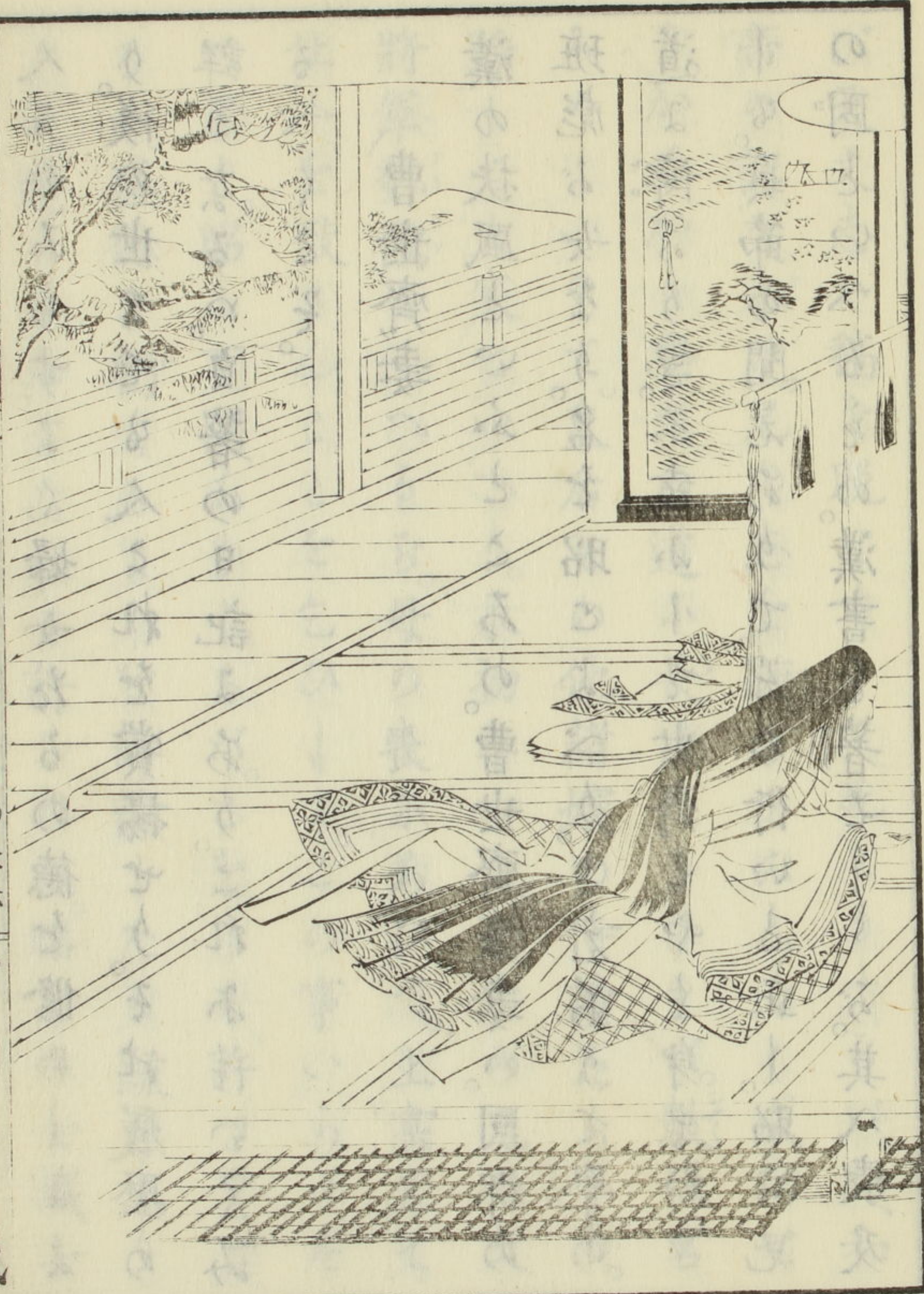
妻やぶて刀子をとりて。おりにかけたる機ふあて
 さていふやう。且お夫この機を見たまへ。蠶の繭
 よりなり立て緯となり。そをかさねて寸をなす。
 寸を積みて竟よ丈となり。匹となる小あらずや。
 今この機を断ちきらば。いあでか丈匹の帛とら
 べき。君今學を積て倦むおとなくを。以て懿徳を
 就まべし。若し中道小廢して家小かへらば。何ぞ
 此機を断つよ異ならむ。とす。め勵まし。あは。
 羊子この言よ感す。復びいぢ。業ををさめ。七年
 までのへらざりけり。妻を常よ身と勞して姑よ

仕へ。又遠く夫のこゝろ小資を飽りて。その業を賛
けり。

紫式部

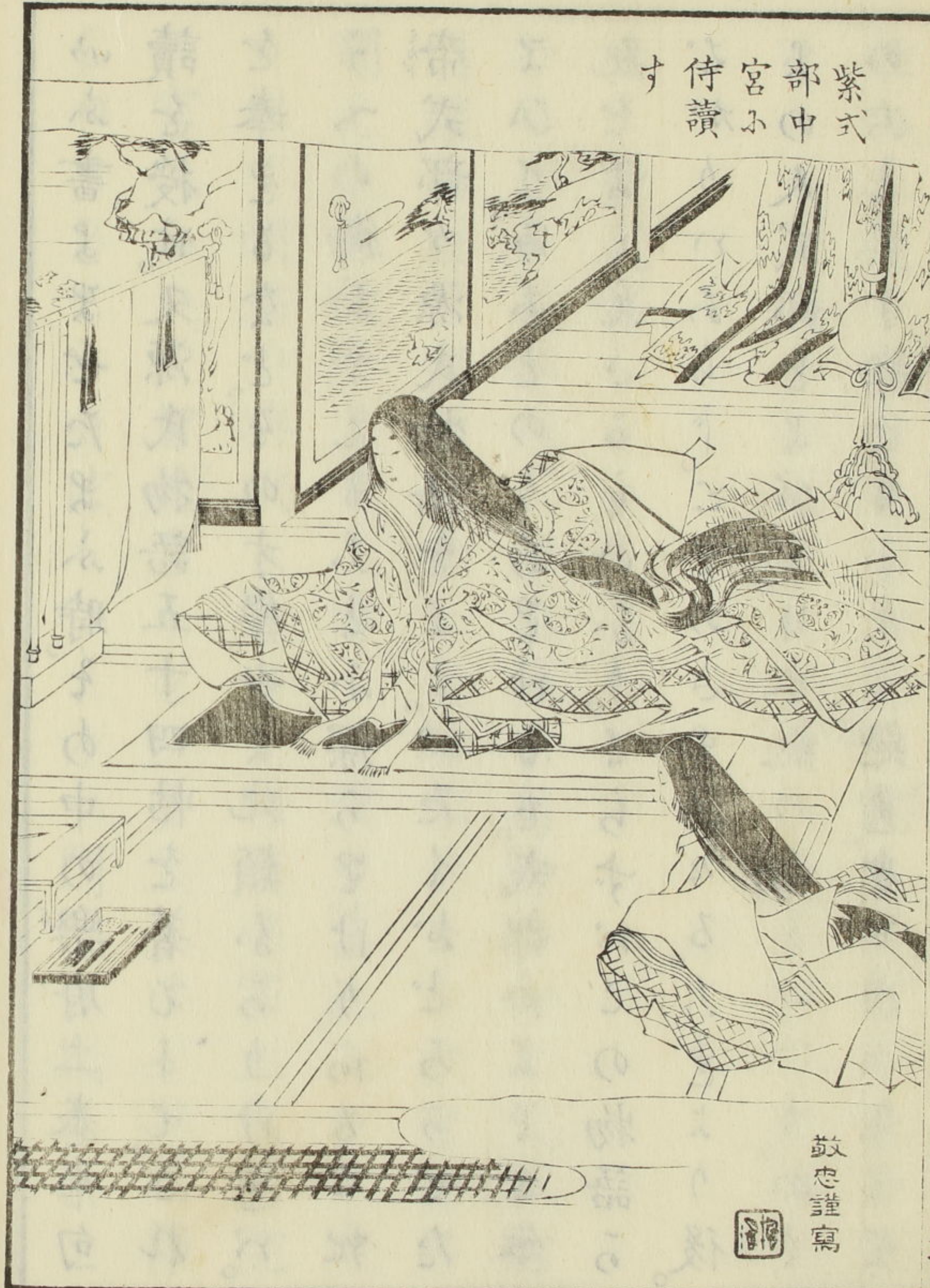
むらさき式部は。式部丞藤原為時の女にて。右衛
門權助藤原宣孝の妻なり。幼なきより才智世に
聞えり。詠歌をよくし。博く和漢の舊記をわたり。
おねて朝廷の典故を通ぜり。時の中宮上東門院
の宮人小い。才智絶えし。その多ありける。小式部
ものさきてみやげのへしけり。門院白氏文集と

いふ書よませたまふ時。その中の樂府二卷の句
讀を授け。又源氏物語五十四帖を著して。これ
を奉むるなど。その才學世に比類ありけり。お
うへの御おがえも。おと小深ありけり。あると紀
帝式部が源氏物語をよこ。いたくおどろかせた
まひて。みおとのりあしけるを。式部はよく日本
紀をよこえさる。そのおなり。さらすばこの物語の
むかりいあらト。ごぞのさまひなる。おきより後。
よの人式部をよびて。日本紀の局といへり。かく
のおとく才學ともおせし絶え。身を法し。こゝ



〇二十六

紫式部
中
宮
侍
讀
す



敬忠謹寫



人よわふらず。よく婦女たるの徳を修めしよ。よ
り。後の世までも人これを賞揚せり。それ履歴の
詳なるハ。自著の日記あり。これおほいそみ
るべくこそ。

曹世齊妻

漢の扶風といふところの。曹世齊の妻ハ。同郡の
班彪の女なり。名を昭とよべり。さへありて學の
道も博ありき。不幸ふして世齊もやく身まかり
しも。貞節の聞えありて。その行いと正し。昭の兄
の固といへるもの。漢書を著しし。其八表及

び天文志の稿を脱せしめて死せりし。昭ハ。昭和
帝の詔を奉け。兄の志を踵ぎておとしく成功せ
り。かむかり學文の道も長けたりけむ。數後宮
よめし。いきて。皇后その他諸嬪の侍讀たりし。め
歸して大家といへり。永初年中。太后の兄の大
將軍鄧騭といへる。母の喪もあひて。上書して
仕へを致さんことを乞ひし。この事いふ。ま
べきと。昭も下問ありし。あが。こをしも許さきざ
るハ。盛徳も虧くるよ。を詳論したる疏を上り
し。小。遂もこふが。おとく許されぬ。昭もと女誠七

篇を作りて。女子の教と一けり。年七十をこえて身まかりくと云ひ。皇太后素服して哀を擧ぐるの禮となり。使者と云はるゝて葬の事どもと監護おさしめられき。その著るす所の書ハ。昭子ハナコの婦の後と輯アツむるところふて。賦頌、銘誄、問注、哀辭、書論、上疏、遺令等の書凡て十六篇あり。

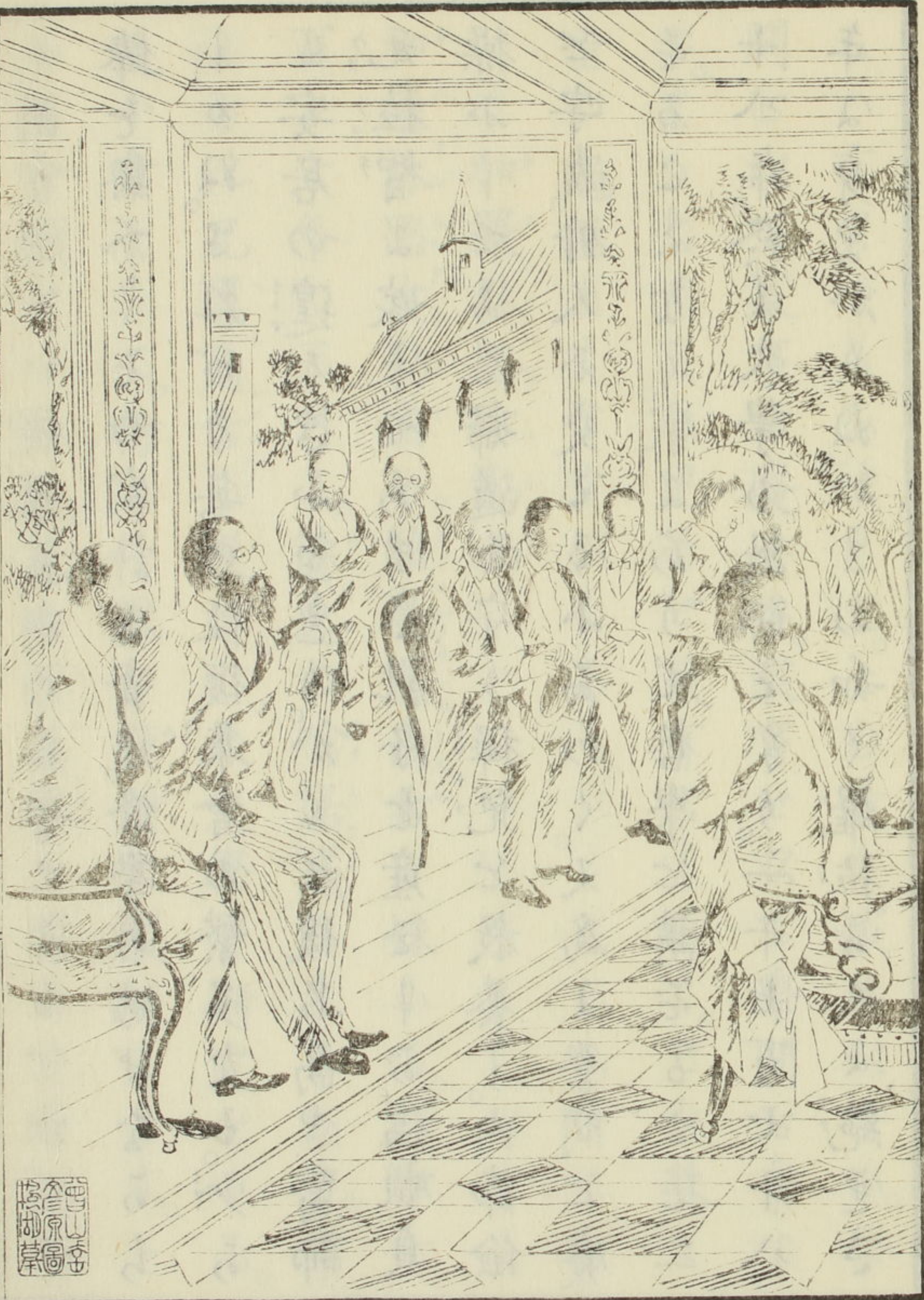
羅拉

羅拉馬利加他隣ハ。一千七百十一年。伊太利の補羅義府ボロニイに生る。其家富めりといふふハあらねど。貧くさ小苦むことなく。適度の幸福を保てり。

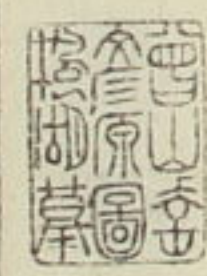
同勞稜索ドウラウレンソクと云ふもの。常々其家より來りて羅拉ララの才と愛し。拉丁語、法蘭西語を教へく己の樂タノシとしける。唯々義理を解し。翻譯をなすと以て足きりとせず。熟く其語と使用し。其文を譯して少しも澀滞するおとなき小至らしめぬ。偶他の學士。羅拉の語學の上達せると異とし。頻りに其父母より家事裁縫をば廢して。一モトら文學、小從事せしめよと勧めけむ。此後羅拉ハ論理學、心理學、物理學と兼ね學びし。日ならずして學術上達し。教師も今を之小及むず。故に學力發明共し拔群

不て。補羅義府の學生之と肩を比ぶるものあり。これよりてさびの教師等ハ。羅拉が奇才とせよ顯そし。普く人目を驚おさむと欲し。先試し公明無私の諸學士をして之を試験せしめし。諸學士皆之を奇として。頻りよ學士の公會より出んことを勧めけり。されど羅拉ハ謙遜なる性なれば。これ勧めと喜むねど。全く教師等のころるよりいづるおとなれば否びおね。枉げて之より従ふ。一千七百三十二年の三月。哲學の公會と関くふ決し。安惹爾宮を以て其會場と定めたり。と

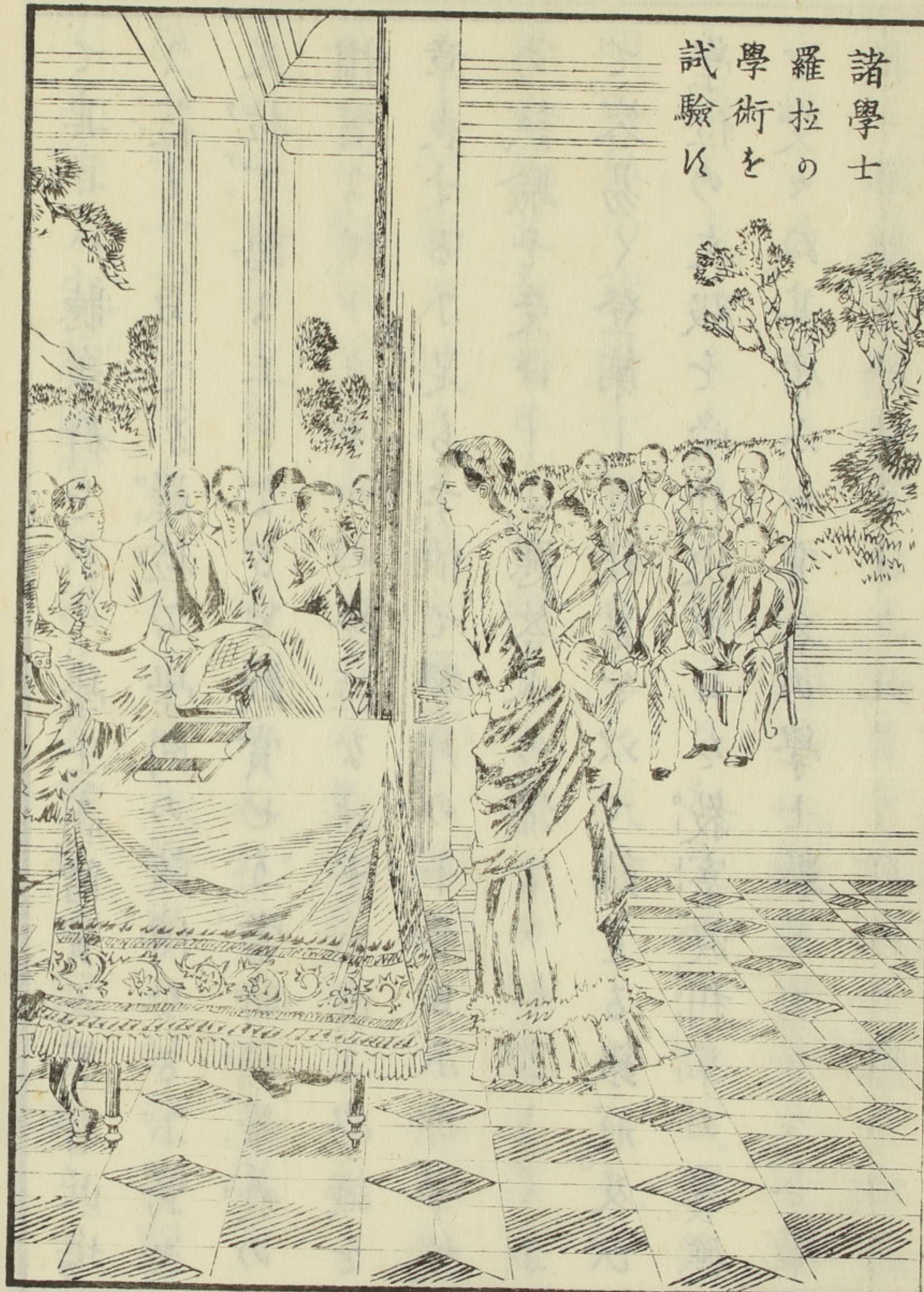
て其日の聽衆群をふし。學士高僧貴人等皆此場に莅し。羅拉ハ學問の該博なる小驚き。又拉丁語も工になると歎賞せり。當時補羅義の慣習よて。ドクトルの學位なけむ。真に學識を章表する小足らず。依て翌月の十二日小哲學校の試験を受けし。應答水の流るゝがぶとく小て。容易く登第し。月桂葉と以て飾るる銀冠。及び學位の衣服を受け。次の日を教宰波利拿の饗應と受々ぬ。其席より有名の學士數多ありて。各羅拉が學識を稱賛しけり。此より羅拉が譽を倍高



〇三十一



諸學士
羅拉の
學術を
試験に



く。國會よりの補羅義府の名譽となるを以て。年俸を與へるその家計を資け。修學の妨げならぬ。されば日毎の往復。集會の繁多なる。少くも安居の違なき小至まり。かくて後名高き醫師瓦拉智を嫁してあまよれ子を産む。温順貞操小してよく婦道を守り。穉兒を教養し。内節儉と守り。外人小交する小あつく。又爲る學問と廢することなく。家ありて哲學と講ぶること二十八年。終る大學の教師となり。一千七百七十八年。身まかりぬ。かくの如く羅拉人よ絶え

るの言までもおけきど。その最も感すべきの學問を以て家事と廢せず。家事を以て學問と棄てず。まよよくその兒子を教育せしむ。こも殊よ世の龜鑑ともなすべくある。

加羅林路古勒西

加羅林路古勒西の維廉黑爾舌の妹小て。一千七百五十年の三月。德逸の哈諾威に生きたり。常よこれ兄黑爾舌小從ひて。天文学と研究せしむ。後小業なりて。特よ月球の模型を製せしより。その名を顯はしたり。兄の黑爾舌の固より著名の

天學家なりけむ。常々加羅林をたのむの傍に
 おき。観察検討の助手たりし。後よりその
 補助する事最も重要にわたりて。必用欠くべ
 らざるの顧問となせり。されど黒爾舌事故あり
 てみづらら観察に從事するおとあさぬ時ハ。
 加羅林として己小代りてこれをおさむるふ
 ど。唯よ時間を告げまと言ふ所を筆記する小止
 まらで。経験理論を擔任し。又諸記録を整頓せし
 むるなど。最も要用ある事ともなせしめけり。か
 りりけむ。英王若身治三世ハ之より月俸を與へ

て。その費用小充てられし。さてその業の至難
 あるといふ。春夏秋冬の別なく。常々宵より曉
 小至るまで。戶外より立ち。特に嚴冬のころハ。観察
 する小最も良き時おむ。寒氣を犯してこれに
 從事し。實驗を記録し。諸書より考證して之を著述
 し。いさかも撓むおとなかりき。かくのおとく
 數年の功をつとて。新々小発見せし所の彗星ハ
 個の中。五個の彗星をばせし許されて。加羅林の
 発見とおせり。此外數多の星雲、星群をも発見し
 けり。又加羅林が著書中より兄黒爾舌が觀察せる

星雲星群を載せしむ。大小此書の聲價とえて。一千八百二十八年。倫敦の天文學會より黄金の賞牌を受け。此名譽會員となせり。兄黒爾舌身まかりて後を。哈諾威に歸り安居して餘生と樂しむ。常は國王貴族に尊敬せられ。名高き天文學士の訪問を受け。身神とも強壯よて樂き月日を送りけり。然して加羅林に自ら教育せる姪に。長トてその名を成し。父祖の業を貶せざるを見。安んトて身まかす。實は無上の幸福とぞいふべき。

路古勒西馬利大關遜

路古勒西馬利大關遜の博士阿里瓦の次女なり。一千八百八年。米國の布拉突堡に生る。家いと貧しく。加之母に常は病牀にありてわづらひけき。路古勒西の父母の教育とも十分は受るふにあとも。極めて不幸のなれど。天稟の才思ありて。四歳の時より一室にこもりて。書籍を熟讀し。又はるくの動物の形を畫き。これ畫に題するの詩を作せるなど。いとめづらき女兒なりけり。ある時おのを此寫し置きしを。人あり

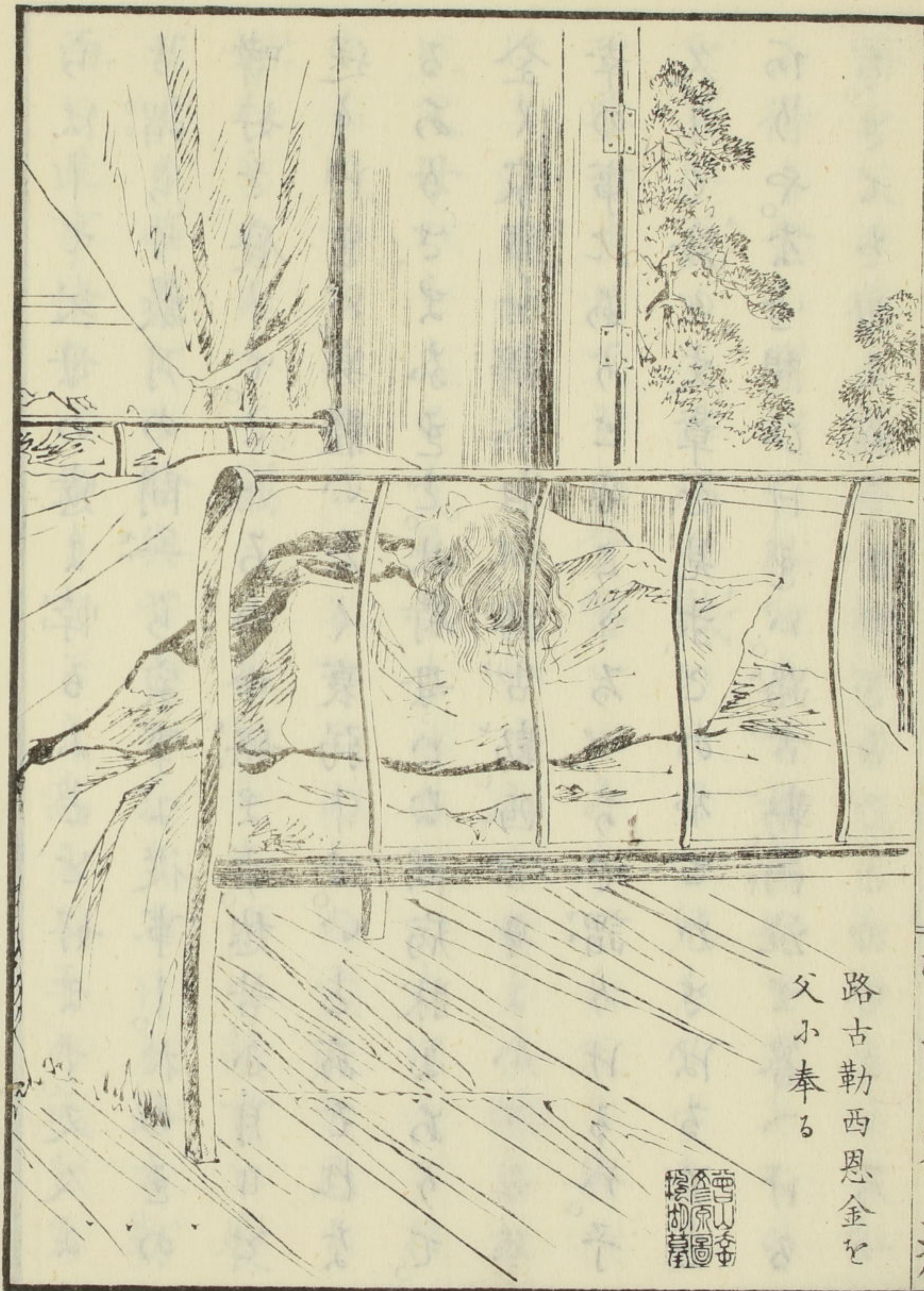
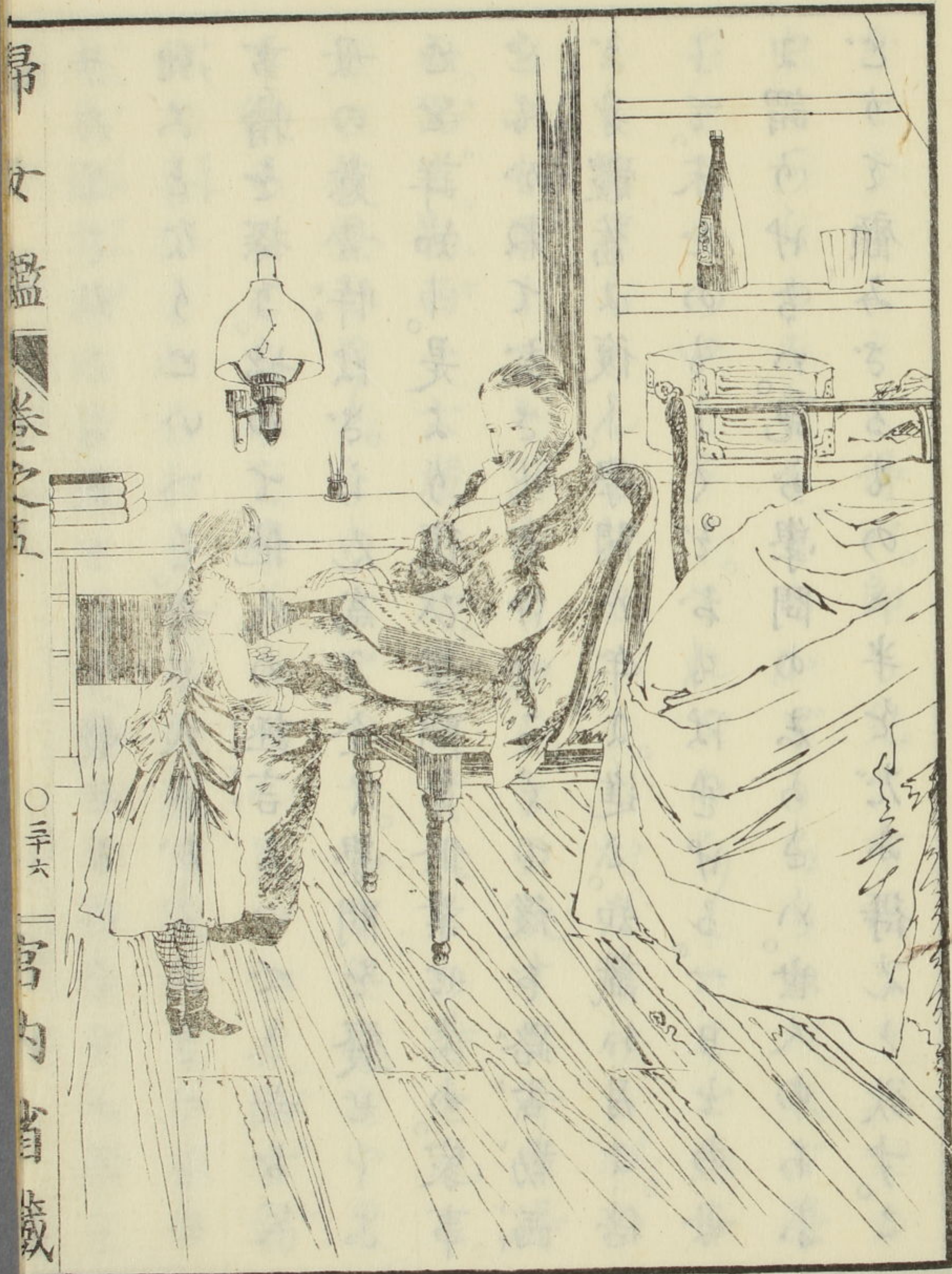
て見はけられ。忽ちこれとひきやりてとてたりとぞ。又世人の志る所の詩も。九歳の時よ作るもの。後よ印行して世上小傳ふるもの。十一歳の時小作るなりとぞ。かくの如き秀才よて何とけむ。父母も喜びて學問よ力と添んとせし。かど。憐むべし家素より貧困なれば。需用の書籍をかひてあたふるふとあたはず。教師をえらびて授業を乞ひ。これよ謝金とあそふるの資力ふけむ。僅る小路古勒西が人よ借りえし書を讀むの時間とあそふるよ過す。かくてやう

やう十二歳小なむるころ。舌克斯畢哥設蒲俄爾斯密士の諸作。まよい當時名高き小説なとと。おほらよい涉獵しけり。就中無益の書と。初め二三葉を開けば。これを分別して讀まざりけり。ある時一人の貴人。路古勒西が作る詩を見て其才能を感で。その貧困を憫していと懇なる書と贈り。金貳拾弗を與へて學資を助けたり。路古勒西はこれ喜び。初めこの金を以てわが欲する書籍を買むんとおもふ。ふところ。病にたゞきて病牀ふる母を顧み。涙をふくきて。此貨

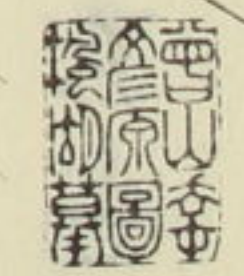
幣を父の前ニ置きいひけるい。こもおもはざる
小得一金おまじバ。これともて母の好まるクもの
を買ひモト覓め。そ此病を慰ナゲめたまへ。兒を必ず書籍
を要せずとて。その貨幣とバみおらラ父ニ與へ
けり。此の如く孝心深くいう小やさ一き性ナかれ
バ。父母いニとより。見キくニそのもいトほトとた
もまぬいナかりキ。さるトこの女の才能を忌ミ
妬ネムむニのありて。竊ニお小其父ニ告げて讀書と廢
せ一の筆墨とも給與せズをズおラ小ける路古勒
西シヤハ此事情をバ知りナおら。爲ニ不平の色をア

らば一て父母の意ニ悖ヒるニおとと好マず。又人ニ
も謂カらニで數月の間ニ一ニら家事ニに従事シ。おのまの
嗜好を廢シて。こノろの中ニ娛メます。愁苦小月日と
送りけニまバ。身體いたく衰弱シて。いとあニそれな
るありニさまおまト。此時母いハなほ病牀ニありて。
全く家事と辨ヘねバ。路古勒西シヤ身ニかハる不
幸の事ハありトもコろノで謂ハりけるい。予
久ク汝が文章を見ず。このかノどいハさハるおと
何りや。など問ひけニまバ。路古勒西シヤ泣キて答ヘける
ち。さてお母いハ今ニまでさルことトもコろノで

○三六



路古勒西恩金を
父小奉る



きたまをぬふ。兒が之を廢せるいそでお久し
にふとなりといへむ。母を大におどろかしてその
事情を探り。始めて他人の誣言いいで。女が父
母の意は忤はざらん爲。全く學問を廢せしめ
とと詳知し。是より復び學問を修業せしめ。家事
ともかねてなさいめけり。あくて後を路古勒西
が身體舊く復し。學問八年進。知識ハ月二倍
して。未だのもしくどおもはせける。一日その母
と謂りけるい。兒が學問の志ありとい。世人のあふ
どりて顧みざるもの半をだふ得んと欲す。こ

きとうることを得ば。即ち兒が幸福なり。凡世の
中何らある書を。そのかぎりあらねば。未だ學
むざるものいと多し。されどのちくいと悉く
ふとあきらめんとおもつり。とかたりけるが。の
ちふを果してそ此言の如く。その欲する所を得
ぬ。路古勒西十六歳の時。ある貴人その詩を見て。
その履歴をきく。その才とめで。よき學校にい
て欲するところを學せしめんといへむ。路古勒
西が喜ひとかさおらず。その意より従ひく。やがて
奄馬維拉特の管理せる。突來の女學校より入學す

るふとぞ得たり。是より於て路古勒西の積年の望
 を達して喜ぶ禁へど。苦學勤勉怠るふと成り
 ざさればこの學校の教師人より謂りけるは。路古
 勒西の入學の初より人を以てその文章のうる
 ばくくしてたくまなるふ驚るべし。又常に草紙
 る所の文ふいめづらしき趣向を向らひし。その
 ずらとちとよく辨へたり。然るにこの科をその
 静あふして倦まず撓まず。堅忍不拔と要されば。
 爲る精神を勞して己と信ずるは勇氣乏しく。
 常に痛むふとあるが如く。試業の重きと思ひ。竟

ふの憂愁の念慮を發して。身の健全を傷くるふ
 至らんことと恐るるとぞ謂りける。路古勒西の常
 に諸教師より愛せられ。累りに登級し。其度毎ふ新
 し記書を研究せしむ。果してその身の健康を
 害し。ある休課のほどは病に罹り。されど施療
 効を奏して。更ふ阿巴尼府の學校に入りたるふ
 復び不治の重症に罹り。少く急りしほどは家
 小歸りけるふ。やうく衰弱してその齡十七歳ふ
 て身まかりぬ。終りふ臨して。初め補助を受け
 たるいとねんごろなりし貴人の名とわすれず。

